

実践事例 1

ルールづくりを工夫しながら、ゲームの楽しさを味わうハンドベースボール

倉吉市立西郷小学校 牧田 浩文

1. はじめに

低学年の子どもたちは、ゲームやボール運動が好きで、楽しみながら取り組んでいる姿をよく見かける。しかし、学年が進むにつれて徐々に技能面での格差や戦術の難しさが影響し、好き嫌いが極端になってくる姿も見る。例えばサッカーでは、男子を中心にしてゲームが進み、痛い思いをすることを恐れ、ほとんどボールに触らない女子の姿があったり、バスケットボールになると、キャッチすることが苦手で、コートに立っているだけでボールに触ろうともしない児童もいる。ボール運動は、ボールを扱う場合の技能と、ボールを持たない場合の動きとがあり、興味関心の高くない子どもたちにとっては、複雑で難解な運動と感じられる領域でもある。

ボールを扱うことに基本的には面白さを感じている子どもたちに、ボール運動の楽しさを味わわせる学習をしたい。ルールを少しずつでも理解し、仲間とともに作戦を生かしてゲームする喜びを体得させたいと願って、この実践に取り組んだ。今持っている技能を生かしながら、さらに技能の向上を目指し、ルールを守って仲間と協力し合ってゲームをすることで、誰もがボール運動の持つ楽しさを味わうことができるのではないかと考えた。

特に、「ベースボール型」の領域には経験や知識、ボールを扱う技能の個人差が大きく、それが意欲にも現れてくる。簡単なルール作りからスタートして、ベースボールの持つ楽しさを味わわせたいと考えた。



2. 研究の実際

「ハンドベースボール」の実践を通して（4年生）

（1）児童の実態

本学年の児童（男子25名、女子17名、計42名）は、休憩時間になると外で元気よくサッカーをしたり、鬼ごっこをしたりするなど活発に活動する児童が多いが、反対に運動が苦手で、休憩時間に教室で読書したり、おしゃべりしたりして過ごす児童もいる。スポーツ少年団野球部に所属し野球に親しんでいる児童が数名いるが、試合経験も少なく詳しいルールを理解しているわけではない。また、道徳の教材で、「オトちゃんルール」の学習をしたときには、野球のルールがわからずルールを理解しにくかった児童が多かった。日ごろから、野球を観戦したり、遊んだりする機会もほとんどなく、「打つ」「捕る」「投げる」などの技能も低く、ゲームの進め方も初めての児童がほとんどである。

（2）指導の実際

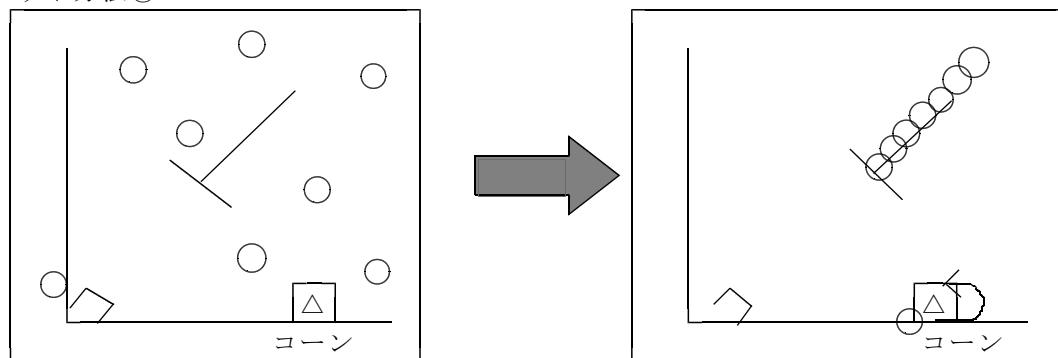
ボール運動では、ルールを守ることが大切な学習内容となる。そのルールは誰もがわかるものが望ましい。「ベースボール」のルールを複雑にしているのが「状況判断をして動く」ことであるため、まずは「ルール」をシンプルにすることからはじめた。

「打つ」ことの難しさを克服しなければならないと思うと、止まっているボールを打たせることは一つの方法である。しかし、子どもがボールを「打つ」場合、どこにどんなボールが飛ぶかわからない。なかなかセーフにならない場合や、逆にアウトにすることも難しくなる。思いっきり「打つ」ことよりも、どこにボールを飛ばせばセーフになるかを楽しむ方法として、どこに「投げる」かから始めた。



一方、アウトの仕方は次のように3段階で進歩させた。

<アウト方法①>



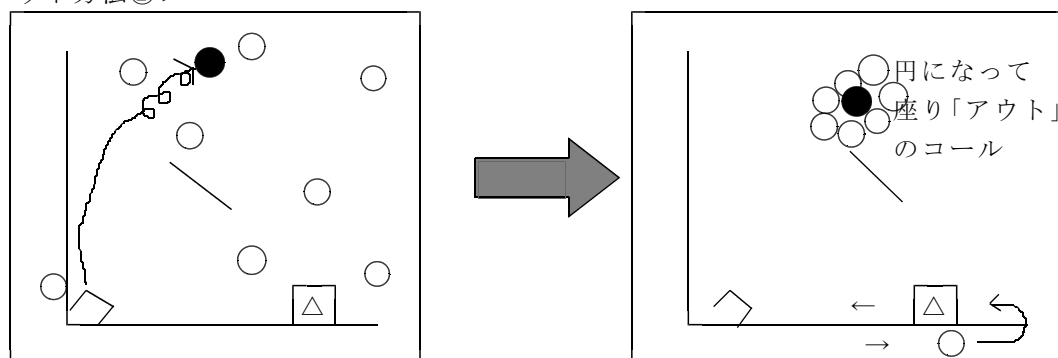
この段階では、まず守備は適当に散らばっている。打者は相手の捕りにくそうなところを選んでボールを「投げ」、一塁に向かって走る。一塁コーンを回ると1点、次はホームへ戻ると2点という簡単な走塁で、得点が取れることにした。

守備側は捕球した子が直線の先頭に立ち、その続きに全員が一列に並んで座って「アウト！」と宣言した瞬間にアウトとする。その瞬間までに、ランナーはどこまで走れるかで得点が決まる。残塁制は取り入れないで、一人ずつ何点取れるかで競い合った。チームの全員が1回ずつ投げて、攻守交代することで理解しやすいゲームとなった。

アウトにするためには、チームで協力しなければならないし、全力で走る必要がある。ボールを捕るために動く子や取れそうだとわかったら早めに並ぶ子もいた。ボールを持たないときの動きを考えるきっかけにもつながった。

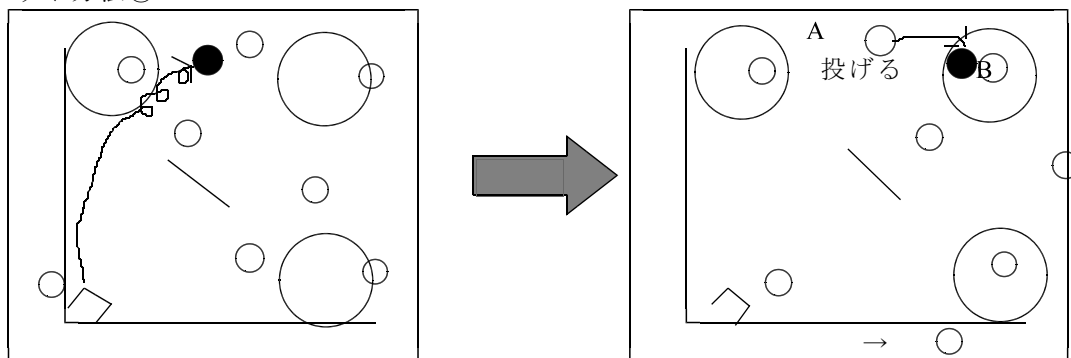
細かいことを言うと、一列かどうか問題になったり、座るタイミングがずれたりして相手チームからクレームが出たこともあった。そこは教師の目で判断したり、見学児童を審判にして判定させたりした。審判には絶対に文句を言わないルールも確認していたので、最終的にはそれに従う子どもたちの姿があった。

<アウト方法②>



次の段階として、①では、ボールをとっても全力で走って中央の直線まで戻る必要があったが、②では、ボールを捕球した場所に全員が集まることでアウトにできる方法を取り入れた。これは、全員で集まることには変わらないが、次の③に向けて、どこでアウトにするかを考えるつなぎの役目と考えて取り組んだ。子どもたちは、ボールが投げられた瞬間、その方向へ全力で走る。そして、捕球した児童と全員との距離を考え、集まりやすい場所で一斉に座り、「アウト！」のコールをする。この方法では、ホームに帰ることのできる児童は少なくなり、得点が難しくなってきた。チームの作戦も、どこに投げれば得点できるか、また早くアウトにできるかに絞られてきた。意外な作戦として、遠くに投げる子はより遠くへ投げていたが、投げる力の弱い子は、確実に1点を取ることを目標にして、ホームベースの近くへバントするような作戦が見られるようになった。

<アウト方法③>



③の段階は、いよいよ「野球」に近いルールとした。ベース（大きめの円形）を3塁までつくり、ホームで4点目が入ることにした。打者は、1塁から2塁・3塁と進塁すればするほど得点が入る。守備側は、その進塁を阻止するために、ランナーが進む次のベースを予測して送球する。ベース上でそのボールをキャッチした子が「アウト」のコールをするというルールを取り入れた。阻止されたランナーは、その直前の塁までの得点となり、守備側はいかに最小失点でしのぐかが作戦となった。ここでは、攻撃側はこれまでと同様に相手の守備位置を考えて、捕りにくそうな場所に投げるのがめあてとなる。守備側では、早く捕球し、近くのベースへ投げるために役割分担が考えられるようになった。しかし、捕球や送球の技能に格差があり、うまく捕球できると失点も少なくすむが、送球や捕球の乱れに乗じてランナーは次々と進塁して得点するという場面が何度も見られた。

また、最後のまとめのゲームでは、同じルールで「打つ」ことを取り入れた。手のひらに乗せたボールを反対の手で打つというものだが、ティーボールにつながるものと考えている。

3. 成果と課題

【成果】

- 初めて取り組んだベースボール型の運動に、子どもたちは強い興味と関心をもって取り組んでいた。日記やカードを見ると、楽しみにしている子がたくさんいることがわかった。特に、これまで運動にあまり親しみをもてなかった子も、楽しかったことを書いており、目標としていた姿に近づくことができたように思う。
- ベースボール型ゲームで、簡潔なルールからスタートし、徐々に複雑にしていくことで、より「ベースボール」の楽しさを味わわせることができた。また、チーム内の協力や作戦の工夫が必要なルールを取り入れることで、より一層その楽しさや喜びを体得できたと思う。最後の試合でも、負けたけれど楽しかったと感想を書いている児童がたくさんいたことから、そのことが分かる。
- 男女で技能の格差が大きいのが、男女とも自分なりの目当てを持って取り組むことができた。また、チームの作戦タイムでも、積極的に意見を出す子が増えた。

【課題】

- 子どもたち自身で審判できるように考えたが、個々の判断力にはかなりの差があり、偏った判定となってトラブルになったこともあった。日ごろの生活場面でも、判定に従ったり、受け入れたりする素地を養う必要がある。
- 今回は、作戦を工夫してゲームに親しむことが大きなねらいで、「打つ」「捕る」「投げる」ことをあまり重視しなかったが、事前の準備や時間のやりくりしだいで、もっと技能面の向上も図ることができたと思う。